

ドルベンの詩をめぐつての考察

山村武雄

I

われわれがホプキンズ (Hopkins) の詩を考える場合に、詩人の体験というものとその作品との関係をつくづく考えさせられるのである。彼はなるほど早くから自然を凝視して来た。しかし教養のある温かい両親の膝下から十歳にしてハイゲイトにあるロバート・チャムリー (Cholmondeley) が経営する寄宿学校 (boarding school) に入れられ、最優秀生としての誇りも高く、十八歳にしてオックスフォード大学での名門、ベイリヤル学寮 (Balliol College) に入り、碩学ベンジャミン・ジャウイット (Benjamin Jowett) をして「ベイリヤルの花」(the star of Balliol) とうたわしめたが、在学中、二十一歳の秋にはカトリック改宗の最後の腹が決まり、「当面のつとめを立派に果せ」というニューマンのすすめもあつて、人文学 (*literae humaniores*) を最優等 (double first) という輝かしい成績で卒業し、一夏を外国で過ごした後に、二十三歳で教団に入り、翌年にはニューマンさえも二の足を踏んだ厳格な訓練を強要するジェスイット教派に自ら進んで入り、以後これに終始したことは、詩人としての観点から見た場合、人間体験において欠けるところがありはしなかつたか？ 勿論詩において直観的洞察力がどこまでとどいているかが問題であつて、生の経験はそれ自体として問題にならないし、また一方、ホプキンズの詩のあの緊迫した切実感はかかる径路を辿つたればこそ生

れたものであつて、彼の人生をあれ以外の形にしたいと願うものでは毛頭ない。しかし彼の人と作品を全体として眺めるとき、人間的体験の幅の狭さということが必然的にからみついてくるのも致し方ないことである。殊に劇作において致命的であつたと思われる。「僕は今まで手がけた何よりも大きな仕事と取つ組んでいる。聖ウィニフレッド (St. Winifred) の殉教についての悲劇とマARGARET・クリザロウ (Margaret Clitheroe) の殉教についての悲劇だ。一つには、僕には変化に富んだ経験が余りに少い。シェイクスピアを読むと、あらゆることを立派にやつてのけることのできる天賦の才能の幅 (scope) と豊かさ (richness) を感じて、絶望感を抱かせられる。その上、彼は充分な人生経験と勿論劇場の實際的知識も併せもつていた」と一八七九年十月八日ブリッジェズ (Bridge) への書簡で言つている。これを裏書きするかの如く、同年同月三十一日のディクソン (Dixon) への手紙では『ウィニフレッド』の方は「少し書いた」(Have done a little) と言つているのに、まる二年経つた一八八一年十月二十九日にディクソンに宛てて、「もし今後、僕に詩を書く機会が与えられれば、二三十行 (a few dozen lines) 既に書き、その他は頭の中に主な構想をもつている聖ウィニフレッドの殉教についての悲劇を完成したい」と言つて、依然として筆が進んでいないことを示している。勿論彼もその手紙で言つているように、彼の環境においてはものを書くという機会が限られている。またよし書いたとしても直ぐ発表できる目当てもない。従つて書くことを焦る謂れは全然ないのである。しかし劇作はあくまで捨てていない。この点は注意を要する。結局延ばし延ばしして、四年余経つた一八八五年三月二十四日にブリッジェズに宛てて「二三日したら『聖ウィニフレッド』から(一)最初の場の最初の部分、即ち十二行或はもつと少いとこのの会話と、(二)少女ウィニフレッドを殺したあとの下主人(註、キャラドック(Caradoc))の独白ソルロキヤ七十一行(大変な骨折りだ!)と、(三)他の独白の初め十二行かもつと少しを君のところへ送るつもりだ」と書いた。これより先一八八二年十一月二十六日には『聖ウィニフレッドの泉』の中の少女達の歌う歌『鉛のこだまと金のこだま』(The Leadens

Echo and the Golden Echo には既に手をつけていたのであつて、ブリッヂェズに「しかし僕はあの一編には幾分途方にくれた形 (dismayed) であつて、しばらく放つて置いてあつた。どうも第一行が氣に食わない」と言つているように、渋滞の理由が詩に凝つているにもあるようだ。だから先に挙げた一八八五年の手紙の中で付け足して、「韻文の作品は骨が折れる。しかしそれは僕にはよくできたように思われる。三単一は現代の劇におけるよりもはるかに厳しく守られることにならう」と言つている。これで見ると構想は相当進んでいるように見える。この手紙に対する返事の中でブリッヂェズはそれが劇ではなく断片である点に言及したらしい。ホプキンズは「どうして君は僕が「劇的詩の断片」をわざと書くなつてことを考えるのだらう?—僕ともあるうものが。僕にとつて、完成された断片、就中劇の断片というものはあらかじめ準備された即興といったように全くあり得べからざるものである。あり得べからざるものだが、しかもわれわれは断片的に書くのである。そしてここ、かしこと所々書いたものを仕上げして、これ以上書き続けることを励ましてもらえるかどうか試すために見本として送つたのだ——そして激励を受けた。つまり君の最近の手紙によつてだ。というのは、それ以前には君がこいつあ—駄目だと考へるだらうと思つた訳だ。事の大小に拘らず、僕には作物に雨が必要なように、激励してもらふことが絶対必要な時がある。そうしてもらえば、後は独り立ちできる」と釈明する。ここで面白いことは、ホプキンズとブリッヂェズの文学批評上の関係において、ホプキンズは詩形及一般的に詩について、概して言えば、自信満々であつて、むしろブリッヂェズの方が敬意を払つて聴く方が多いのに、劇となると甚だ自信のないものになつて來てゐることである。實際上、最初の場の最初の部分が約二倍の行数になつてゐるだけで後はそのままとなつた。『マアガレット・クリザロウ』の方は現存してゐるものは詩であつて、劇または劇の断片ではない。恐らくホプキンズは計画を変更したのであらうとアボット (Abbott) は考へてゐる。劇には絶望したのであらう。

それでは彼の本領とする抒情の方に眼を向けよう。ヒュー・イアンソン・フォーセット (Hugh Hanson Fausset) は「ダン (Dane) の今日われわれに對してもつ特別の意義は、あらゆる人が批判的自セルフ・クリティシヤスネス意識を通して、本能的調和から精神的調和へと進むときに陥る不調和と分解の状態を熱狂的な洞察力をもつて述べた最初の天才の一人であったという事実に存する」と言っているが、ホプキンスにおいては最初から本能的調和を捨ててかかっていると言えるであろう。従つてダンの『父なる神への讃歌』(A Hymn to God the Father) における

(一)

御身許したまうや、初めの日のかの罪、

昔犯したるものなれど、わが犯ししものを。

御身許したまうや、その後ののちかの罪、

つねに嘆き悔めど、今もなお犯す罪を。

許したまうとも、御身がこと終らず、

われに新たななる罪あれば。

(二)

御身許したまうや、他人を罪に誘いざなひし

かの罪、わが罪を他人の入口となしたる罪を。

御身許したまうや、われ一とせ二とせ

避けたれど、二十年沈面したるかの罪を。

許したまうとも、御身がこと終らず、

われに新たなる罪あれば。

III

われに恐怖おその罪ありて、生命いのちの絲紡つむぎ

終えんとし、あわれ岸きべに果つべしと。

さあれ、御身みみ宣のたまはせたまえ、われ死すともなお御子みこは、

今、はた前に照りしごと、照り榮えて変らじと。

かく宣のたまはば、御身みみがごとすみしなり、

われに恐怖おそもはやなけん。

I

Wilt thou forgive that sinne where I begunne,

Which is my sin, though it were done before?

Wilt thou forgive those sinnes, through which I runne,

And do run still : though still I do deplore?

When thou hast done, thou hast not done,

For, I have more.

II

Wilt thou forgive that sinne by which I have wonne

Others to sinne? and, made my sinne their doore?

With thou forgive that sinne which I did shunne

A yeare, or two : but wallowed in, a score ?

When thou hast done, thou hast not done,

For I have more.

III

I have a sinne of feare, that when I have spunne

My last thred, I shall perish on the shore ;

Swear by thy selfe, that at my death thy soune

Shall shine as he shines now, thou hast done,

I feare no more.

このような明確にして現実的な罪の意識がホプキンズにあるであろうか？

なにゆえに罪人の道は栄えるや。なにゆえに

わがなす努力、なべて失望に終るや。

おお、酔漢、情痴の奴隷は

片手間に、主よ、御身がため生涯を捧ぐる

われにまさりて 栄るに。

トルペンの詩をめぐつての考察

Why do sinners' ways prosper? and why must

Disappointment all I endeavour end?

Oh, the sois and thralls of Iust

Do in spare hours more thrive than I that spend,

Sir, life upon thy cause.

とホプキンスは『恐ろしきソネット』(The terrible sonnets) の一つで歌っているが、そこでは自己の純潔に対し、自己の精進に対する矜持と、報われること少きことに対する忿懣と自己憐憫とを示している。従つてダンに見られるような罪を許されたものの平安というものが影をひそめる傾向がある。それ故最後の作品は読む者をして詩人自身の心境に同情と哀感 (pithos) を感じさせるが、直接的に必ずしも宗教的愉悦と調和へと導くものばかりではない。この意味において或るものは宗教詩と称することが妥当でなく、究極において宗教に根ざしたものであつても、その態度においてあくまで抒情である。最後のものばかりでホプキンスを論ずることはできないが、今の場合、彼が行きついたところが問題になるのである。ジョージ・ハーバート (George Herbert) もウォルトン (Walton) によればケンブリッジ大学の代表演説者 (Orator) であつた間、学業を放擲して宮廷に入りびたつたものだからである。この間の事情は彼の詩『御一瞥』(The Glance) に明らかである。

はじめて 御身のやさしく、慈悲深き眼が

青春と暗闇くらやみのさなかにも、罪に酔い

のたくり伏せし、このわれを

うち守り給いしときぞ。

When first thy sweet and gracious eye

Vouchsaf'd, ev'n in the midst of youth and night,

To look upon me, who before did lie

Wet'ring in sinne.

このような罪ある者にも御眼を注ぎたまう主の慈愛にひたつて甘い不思議な歓喜が心に満ちわたるのを感じたハーバートにとつては、よし悲しみが頭を上げようとも、すぐにそのときの御眼差が思いだされて愉悦と変えられるのである。ところが『腐肉の慰藉』(Carion Comfort)におけるホプキンスはどうであろうか。

いや、断じてしまい、腐肉の慰藉なる「絶望」よ、御身に舌鼓打つことを。

燃りをもどすまい—いかほど緩んでいても—わがうちなる人間の

最後の糸を。また倦み果てて、「もう駄目」と叫ぶまい。私はできるのだ。

何かができる、希望すること、昼がくることを望み、死ぬることを願わないことが。

しかしああ、しかしおお恐ろしき御身よ、なにゆえ御身は 荒々しく わが上に揺りたまうぞ、

世界を振じ苦しめる御身の右足を？ 獅子の脚をかけたまうぞ？

暗き貪る眼（まなこ）もて わが砕かれし骨を調べたまうぞ？ 吹きつけたまうぞ？

おお、あらしのまにまに、倒れ伏すわれに。御身を避けて逃れんと必死なるわれに。

なにゆえ？ わがもみながら吹き飛んで、わが穀物が混ぜもなく 淨くあらんため。

いな、すべて苦しみ、ひるむものの心に、われ咎（とが）に、いな手に接吻（くちづけ）した（つもりな）れば、わが心よ、ご覽！ つつまれたる力、ぬすまれたる喜（よろこび）が笑い、喝采するだろ。

だが、誰を喝采するのか？ 天を動かす手で私を抛り投げ、足が私を踏んづけた

あの英雄？ またはそれと戦つた私？ おお、どちら？ 両方？

今消え去りし暗闇の

あの夜、あの年、あわれ、われ（私の神！）わが神と組討ちいたり。

NOT, I'll not, carrion comfort, Despair, not feast on thee;

NOT untwist — slack they may be — these last strands of man

In me or, most weary, cry I can no more. I can;

Can something, hope, wish day come, not choose not to be.

But ah, but O thou terrible, why wouldst thou rude on me

Thy wing-world right foot rock? lay a lion's paw against me? scan

With darksome devouring eyes my bruised bones? and fan

O in turns of tempest, me heaped there; me frantic to avoid thee and flee?

Why? that my chaff might fly; my grain lie, sheer and clear.

Nay in all that toil, that coil, since (seems) I kissed the rod,

Hand rather, my heart lo! lapped strength, stole joy, would laugh, cheer.

Cheer whom though? the hero whose heaven-handling flung me, foot trod

Me? or me that fought him? O which one? is it each one?

That night, that year

Of now done darkness I wretch lay wrestling with (my God!) my God.

「僕は長い沈黙のうちに二つのソネットを書いて、それを今推敲している。いままでに血を絞つて書きつけたものももしあつたとすれば、これらのうちの一つであつた」とホプキンスはブリッヂェズに言つた、そのソネットが多分この『腐肉の慰藉』だとブリッヂェズは註している。眼は痛み、身体は衰える。奴隷の如き無味乾燥の公務は山積する。芸術的身長も伸び悩んでいる。そして何にもまして自ら課した宗教的目標と不退転の精進。ひたぶるに「絶望」に身を任せまいと、必死の力を揮う。しかもその「絶望」そのものが「摂理」であり、「神」であるとは何たる冷厳にして苛酷な事実であろうか? 「絶望」を逃れんとすれど、踏み倒し、吹きつける。しかし詩人はその咎を甘受するつもりである。(人間の心の安易さよ!) 苦しみのゆえに喜びの生れることを期待して。それは『ドイチェラント号難破』にも通ずる受難の教理である。

詩人の作品一二を引いて、比較論を試みることは当を得ないことである。またここで作品の文学的価値を問題にしているのではない。尤も文学的価値といえば、今あげた中では『腐肉の慰藉』がすぐれていると思うのであるが、そういう作品を生むに至つた要素として、個々の詩人にそれぞれ違つた作風があるけれども、矢張り十七世紀初期の英国とヴィクトリア朝の英国、狭くはエリザベス朝にひきつづいて、華やかな宮廷にあこがれ、政治的、社会的野心に動かされる風潮のダン、ハーバートのオックスフォード、ケンブリッジと、ロマン主義の洗礼をうけ、産業革命を目のあたりに見、女王を中心に謹厳な家庭生活が微動だもしない權威をそなえて来ており、オックスフォード運動に風靡されたホプキンズのオックスフォードとの相違が前二者と後者の人生径路と宗教的作品の風格を生むに至つた大きな要素をなしたと思われるのである。そして持味こそ違へ、同じくオックスフォード運動の波に乗つて咲いたもう一輪の花がドルベンである。

II

ディグビ・マックワス・ドルベン (Digby Mackworth Dolben) (1848-67) はホプキンズより四歳年下で、その短い十九年の生涯を溺死という不幸によつて終るまでに二人は唯一回しか会つていない。しかしその一回の会合がホプキンズに深い感銘を与えた。ラグルズ女史 (Ruggles) はそれがホプキンズのカトリック改宗に決定的刺戟を与えたと言ふ。『ドルベンの宗教的な脱線行為 (esapades)』は良識ある信仰とは似て非なる茶番 (travesty) にすぎない。そしてホプキンズはこれを認めた。「ドルベンには力が非常に欠けている、—いや、もつと、良識の方が」(There was a great want of strength in Dolben — more, of sense.) と一八六七年に彼は相槌をうつように言うのであつた。しかし一八六五年には、十七歳にして旧修道会 (モナステリッシュ・オーダー) (ベネディクト会系の修道会) 員なる、その訪問者 (註、ドルベンは始めて遠戚にあたるブリ

「ツァエズとオックスフォードを訪れてホプキンスと会合した。」が確固たる信念をもち、反対に抗し、自ら進んで、その信念を積極的に表明したということは如何なる論理をもつてしても覆し得ない事実であつた。これと少くとも同じ位説得力をもつていたのはホプキンスがドルベンに心ひかれたという事情であつたであらう。彼等の短い知合い関係の間、彼は年下の少年に対してハイゲイトの学校で感じ、終生、相手自身は何も努力したり、意向を見せたりするのではないが、或目に見えない相性 (*featureless idiosyncrasy of their beings*) によつて完全に參つてしまわされる、ある好きな人 (*chosen spirits*) に対していだくあのしばしば一時的だが、激しい讚美の情をいだいた。またしても、ハイゲイトの友情と同じように、弱味があるのはホプキンスの方であつた。「ドルベンによろしく。数限りなく手紙をやつたが、ちよつとも返事がない」と翌年の夏ブリッヂェズに書くのだつた。』とラグルズ女史は言い、更に語をついで、

『感情がからむと ゆつくりした心境の変化を急激に進展させる上に大きな力となることがしばしばある。一八六五年四月二十二日の日付けのある、ホプキンスの遺した書類の中で発見されたソネットはドルベンと関係があると信じられている。それは ドルベンが改宗者 (ホプキンス) の胎動を始めている考えに及ぼしたかもしれない影響をはめかしている。「わが至福に御身の加わりしことの動かし得ざる消息を なにびとよりもよく認めうる御身」とホプキンスは書いた。』このラグルズ女史の説はハンフリー・ハウスの説 (『そのソネットはドルベンがその宗教的危機に密接に関連していたので意味が不明である』) を踏襲したものが、腑に落ちない点がある。このソネットで

友よ、御身いずこにいますや？ 再び相見ることなき君、

心にいだくも、正しき姿のうつることなき君。

うつせみのこの世に遠く離れていたまうか、

さもなくば、後の世にまみえん縁か、
わが至福に 御身の加わりしことの
動かし得ざる消息をなにびとよりもよく認め得る君。

WHERE art thou friend, whom I shall never see,

Conceiving whom I must conceive amiss?

Or sunder'd from my sight in the age that is

Or far-off promise of a time to be;

Thou who canst best accept the certainty

That thou hadst borne proportion in my bliss.

日付にして誤りなければ、一八六五年四月二十二日と言えばドルベンと二月に会つてまだ二カ月余である。勿論まだドルベンは生存している。このドルベンのオックスフォード来訪はブリッヂエズの言葉によると「今や身近かな實際的な希望の、氣に入つた理想の故郷であるオックスフォードを見る」ためであつた。いづれベイヤル学寮を受験する人である。このことをホプキンズが聞かない筈はない。話は違ふが、『ドイチュラント号難破』について、「君の興味と参考のためにつけ加えるが、この詩の中で私自身に關することはすべて厳密に、文字通りに真実であつて、すべて起つたことだ。何物も詩的埋草(poetical padding)のためにつけ加えてはない」と言つているが、ホプキンズに限つてドルベンを「再び相見ることなき君」と呼ぶことは信ぜられない。して見るとラグズ女史の挙げる、ドルベ

ンがホプキンズのカトリック改宗に決定的刺戟を与えたという証、証は崩れてくる。しかし彼女が挙げてゐる。「確固たるカトリック的信念をもち……その信念を積極的に表明した」ことは事実だし、ホプキンズが彼に愛情をもつたことも、ブリッヂエズが「ジェラードは彼に対し大変な讚美の情をいただき、常に非常な愛情を以て彼のことを語つた」と言い、ホプキンズ自身ドルベンの死に際して「彼の場合におけるほど（肉体と心と生活における）多くの美、そして益々多くなる見込の人を失つたことはめつたにないことを君も承知している。全世界においてめつたにないという意味だ。というのは条件がそうたやすく揃わないから」と言つた。ドルベンがホプキンズ改宗に刺戟を与えたことは充分考えられることである。

III

ドルベンの詩は、彼がなにごん若年で死んだので、数は五十三篇であるが、質はこの齡にしては稀に見る立派なものが多い。しかしそれはさておき、ダンやハーバートと違つて、ホプキンズやドルベンのような人生径路を辿つた人は女の臭いをかぐ時機がない。従つて興味というか関心は男性に向うのもやむを得ない。男性に対する愛情ということが、程度の差こそあれ、ホプキンズとドルベンの詩における共通点となつてゐる。

ドルベンの愛情の対象はイートン校 (Eton College) での、同じく宗教的関心をもつた友人マニング (Manning) である。ブリッヂエズの筆を借りると、「この観念的な愛情を理解するには、その愛情の対象が全く尊敬すべき人であるばかりでなく、多少その傾向がある人ならば、偶像化しないではおれないような人であつたということを充分認めなければならぬ。生徒時代にせよ、大人になつてからにせよ、晩年にせよ、或はある人のように生涯を通じてにせよ、マニングを知つていた人は誰でも、例外なく、愛と賞讃の言葉だけで彼を語つた。また彼をよく知つていた人

で、容姿と性格の気品、愛らしき、美しきの渾然一体となつた点において彼に比肩するものがあると認める人はいなかつた。」マニングの方ではそんなに偶像化されているとは遂に知らず仕舞であつた。ドルベンもその愛情をそつとしておいてサブリメイト (sublimate) した傾向がある。

少年の友情とや！ いな、鐘楽に応和せよ

われら別れしその日より、ライムの樹蔭に

「さよなら」と 君そと言いて、もだしつつ、

去り行きたまいしその日より、奏でられたる鐘の音に。

わが大なる愛情は 一時の激しき熱情の

生みたるものにあらざると 時の流れは証しぬ。

悪意に満てる中傷も 時の力ときおいえす

やがて さ霧の消ゆるごと 消ゆるものとは思ふなり。

わが心にはつれなくも ことさらもうけし距離は

いやしき耳目の快樂と 縁なきことを示したり。

わが生涯を階まはしと刻みて 愛を高め行き

わが肉体の成長と 歩調そろえて伸びきたり。

さらば 来りて踏めよかし。別離この木の実踏みしめて

自己完成の美酒となさんため。

A BOYISH friendship ! No, respond the chimes,
The years of chimes fulfilled since we parted,
Since ' au revoir ' you said among the limes,
And passed away in silence tender-hearted.
I hold it cleared by time that not of heat,
Or sudden passion my great Love was born :
I hold that years the calumny defeat
That it would fade as freshness off the morn.
That it was fathered not by mean desire
Of eye and ear, doth cruel distance prove.—
My life is cleft to steps that lift it higher,
And with my growing manhood grows my Love.
Then come and tread the fruits of disconnection
To the sweet vintage of your own perfection.

マニングに宛てた形式をとる『手紙』(A Letter)という詩では、彼の友愛の行く手に大天使 (archangel) が立ちはだかり、愛と生命の輝きとやさしい現実が「永遠」の前に消え失せ、またその昔二人が育てた花園で突如 頭上に

劍が燃え、神の怒りの酒に酔つて幾哩となく荒野を歩き、遂に苦悩の網破れ、囚人が解放され、隠された平和、火の彼方の泉の国、完全無欠の美わしき御顔、願求の極致に達したことを述べている。

マニングの愛はこのように、愛を機縁として「自己完成」へ、救済へと指向する多分にプラトニックな要素をもつ。ホプキンスはあくまで神に対する奉仕へ求心的に動いて、男性の美に対する嗜好は、彼も認めるように一時的には強くとも、永続して偶像化することはない。『ラップ手の最初の聖さん式』においては、「嘘、偽りを口にせず、自慢も嘲笑もしたことはない、美しい男性の 息づく純潔の花」(Tongue true, vaunt- and tauntless; / Breathing bloom of a chastity in mansex fine.)「指で押した水蜜桃のように 柔らかく私の教えに応じてくれる 柔軟な流動する若者」(In-ber liquid youth, that to all I teach / Yields tender as a pushed peach) この若者が次第に蝕まれて、やがて落花する兆しを示すのを見るほど気の揉めることはない。これはホプキンスの如何ともすることのできない、キリストが支配される領域である。しかし今護符でも武器でも、何でも若者の心に悪を逐けて、愛を永遠にしまつておくものが欲しい。そのほんの少しの胎動も私を高めてくれる、あの美しい希望が破れないように、もう私は彼を見ないでいたい。すべては神に任せられるが、次のことだけは記しておく。もし祈りが聞かれないならば、金剛不壊の天を軋めかせ振動させるであろう訴願に口付けをしたと。

ホプキンスの場合は熱烈な父性愛の一面をもつ。そして著しく感覺的であるのを特徴とする。

ドルベンの詩において男性に対する愛情が強く表れているが、また他の特徴はキリスト教信仰とギリシャの詩及び思想への心酔が並存していることである。これはホプキンスの詩においては考えられないことで、古典の泰斗ジャウイットの薫陶をうけて優秀な成績で卒業した彼、ダブリンのユニヴァーシティ・コレッジ (University College) で古典を教授した彼も詩において異教崇拜の介在は許さなかつた。この点からも、勿論ドルベンに大学受験前の若さを考

慮しても、集中性、論理性、徹底性が薄弱であつたとの非難は甘受しななければならないのではないか。先に引用したホプキンズの「ドルベンには力が非常に欠けている、いや、もつと、良識の方が」という言葉が首肯される。しかしドルベンの神に対する態度は人間の愛の面を強調して、これに抱かれることを願うようなところがあり、この点でもホプキンズと対照的であり、もし彼がもう少し長命を保つて、同じく聖徒の如き生涯を送つたとしても、ホプキンズのような深刻な苦悩は味わずしてすんだかもしれない。ハーバートといい、ディクソンといい、ドルベンといい、ホプキンズが心引かれた宗教的な詩人にそんな醜藉な人が多いのも味深いことである。

(註) 1 「彼の顔は この前の学期には 僕に魅力をもつていた。僕は大抵次から次へと誰かに魅惑されている。時々 僕は僕をひきつける顔を嫌っている。しかし 時には、今の場合のように、全然反対で、その顔が嫌いであるのにひきつけられてい
る。」

(His face was fascinating me last term: I generally have one fascination or another on. Sometimes I dislike the faces wh. fascinate me but sometimes much the reverse, as is the present case.) *Letters I*, p. 8.